



シュテファン・ツヴァイクの悲劇（中）

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 砂原, 教男 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24729/00004624 |

シュテファン・ツヴァイクの悲劇(中)

砂 原 教 男

ツヴァイクが故国オーストリアを自らの意志で捨て去った一九三四年二月には、隣国ドイツでの亡命者の大波はもうおさまっている、一九三三年四月に実施された国外旅行の際の強制査証制度はその役目をおえて、一九三四年一月一日に廃止されている。⁽¹⁾ その間ナチス・ドイツを捨てた亡命者は四〇万人にのぼるが、その内ツヴァイクと同じ文学者は二千人強といわれている。⁽²⁾

ヒットラーが首相に指名され、ナチスが政権を掌握したのは一九三三年一月末だが、それでもつてすぐに亡命者が国を捨てたのではなく、亡命者が増加するのは二月二七日の国会議事堂炎上事件以後である。それ以前に亡命したのはプロイセン・アカデミーの文学部門の長 (President) を勤めていたハインリッヒ・マン (二月二一日) から五人ぐらいで、ハインリッヒ・マンの弟トーマス・マンはたまたまこの時期に国外旅行を計画し、そのまま帰国しなかった

だけといわれている。国会議事堂の炎上した夜のうちにテロと迫害がはじまり、以後の数日間に大量逮捕が行なわれ、そのなかにはアノナ・ゼーガースのような文学者やカール・アウグスト・ヴィットフォーゲルのような学者もいて、彼等は「シュパンダウの要塞」かゲシュタポの地下牢にほうりこまれた。この国会議事堂炎上事件は現在ではナチスの仕組んだものであることは自明のこととされているが、当時ナチスは何とか共産主義者の行為にしようとしてあらゆる手段を講じていたが、信ずる者はだれもいなかったらしく、ツヴァイクは次のような話を伝えている。⁽³⁾

「すでに新政体の最初の頃に、私は何気なく一種の反逆の罪を犯していたのである。すなわち当時全ドイツにひとつの映画が上映されていた。それは私の短篇小説『燃える秘密 (Brennendes Geheimnis)』によって作られて、同じタイトルをつけられていた。――

ところが国会焼打ち後その日のうちに、(この事件をナチスの人々はコミニストに転嫁しようとしたが駄目であった)「燃える秘密」という映画館の看板とポスターの前には人々が集まり、互いに目くばせしながら肘をつき合って笑っている、ということが起こった。まもなく秘密警察たちは、なぜ人々がこの題名を笑うかを理解した。そしてその晩のうちに警官たちはオートバイをあちこちに飛ばし、上映は禁止され、次の日から私の短篇小説「燃える秘密」という題名は、あらゆる新聞広告、あらゆるポスター柱から跡かたもなく消えてしまった。」

この事件以後のナチの狂暴ぶりは異常で、再びツヴァイクの言葉をかきれば「次に国会焼打が来、議会が消え、ゲーリングは彼の徒党を放ち、一撃でドイツのあらゆる権利は粉碎されてしまった。平和の只中において強制収容所があるということ、無罪の人々を裁判も形式も踏まずにかたづけられる秘密の部屋が兵営に建てられたということ、そういうことを戦慄しながら聞いたのである。」⁽⁴⁾

三月二三日に全権委任法が四四九対九四の大差で成立すると、ヒットラーは国会はもちろん大統領にも拘束されることなしに行動できることになった。三月三十一日には宣伝相ゲッペルスはユダヤ人ホイコットの指令を発している。かくて、翌四月一日にはユダヤ系の商店・医師、弁護士ホイコットが行なわれた。四月七日には非ア

リア系の官吏は一斉に強制退職させられた。四月二二日にはユダヤ人開業医の国民健康保険からの締め出し、三日後の二五日にはユダヤ人学生・生徒の就学制限と矢継ぎばやの反ユダヤ措置の実施がおこなわれた。ヒットラーはユダヤ民族のドイツからの締め出しという最終目標に向かって、着実に施策を実施していつていたわけだが、人々は「それはただ最初の思慮を失った怒りの突発にすぎない——そのようなことは二〇世紀においては長続きできるわけではない」⁽⁵⁾と信じ切っていた。世界も「聞き耳をたて、最初は信じられぬ事柄を信じることを拒んだ。」ナチも巧妙であった。五月一〇日夜全国の大学所在地で行なわれた反ナチ書物の焚書はあまりにも有名であるが、この準備として親ナチス系の学生団体やナチスの親衛隊(SA)が一般書店に押し入って「焚書」の対象になる書物を押収するという形で、書籍商組合に圧力をかけた。そんなこともあって、焚書の三日後の一三日には書籍商組合の理事会は一二名の「ドイツの名誉を損なう」と判断された著作者を発表した。その中にはハンリッヒ・マン、エーリッヒ・M・レマルク、アーノルト・ツヴァイクなどが含まれていた。五月一六日付の「書籍商組合ニュース(Börsenblatt für den Deutschen Buchhandel)」には「一掃すべき書物の第一回公式リスト」が掲載されており、左翼作家と並んでリベラル派の作家である、クラウス・マン(トーマス・マンの息

子)やシュテファン・ツヴァイク、さらにはフランスのアンリ・バリュビュス、ロシアのマクシム・ゴーリキーを含む一三一名の名があげられていた。しかし、この中には二月一〇日のミュンヘン大学でのワグナー生誕五〇年を記念した集会で行なった『リヒアルト・ワグナーの苦悩と偉大さ』⁽⁶⁾という講演を引つ提げて、翌日から、「わずかな手荷物をもつただけで」、アムステルダム、ブルッセル、パリへと講演旅行に出国したまま帰国せず、スイス南部(その後南フランスに移り、一九三三年秋にはチュウリッヒ湖畔キュスナハトに居をかまえた)⁽⁷⁾に滞在して実質的に亡命者になっているトーマス・マンの名はない。この講演は、ヒットラーお気に入りのワグナーが「最も深遠なるドイツ的感情の音楽的演劇的表現」を行なったものとして無条件の崇拜の対象にされていたのを、「非常に偉大な人間で」「天才的なディレッタントと称賛」することによって、ナチスの描く国粹的英雄像を拒否した。だから、マンが二ヶ月後、講演後の休養をスイスでとっていた四月一六／一七日、ミュンヘンの代表的新聞『ミュンヒナー・ノイエステ・ナツハリヒテン』はバイエルン州文部大臣、バイエルン国立劇場総監督、作曲家リヒャルト・シュトラウスというような錚々たる著名人たちの署名入りのワグナー講演非難の文章を掲載している。わずか二ヶ月で事態は急変し、マンは思わざる亡命生活にはいらざるをえなくなってしまう

た。

以上の状況を知ってみると、書籍商組合のブラックリストに彼の名前は載せられて当然であったろう。しかし、一九二九年にノーベル文学賞を貰ったマンを切るわけにはゆかなかった。少なくとも対外的にはまだまだ利用価値がある。⁽⁸⁾

この書籍商組合作成のブラックリストは三四年夏には一五七名の作家がのせられていたが、そこにも矢張りマス・マンの名はない。

ナチスは一九三三年八月二三日を第一回とする国籍剝奪者名簿を公表し、一九八三年末までに八四のリストによって約五、〇〇〇人以上の人が国籍を剝奪されている。この数は一九三九年になると飛躍的に増大して一月から四月までで三、〇〇〇名が国籍を剝奪されている。しかしこの国籍を剝奪された人たちは、前述のとおり、この当時にはもう国外にいたと考えてよいだろう。だが、これら故国をすて、異郷の地で生きてゆくことは生半可の苦しさではないだろう。故国を追われ、異国で暮す亡命生活の困難さを知らなければ、ツヴァイクのブラジルでの自殺を到底理解できないだろう。当時のドイツ語作家で恐らく一番売れていた作家であったツヴァイクですら、亡命生活の重圧に抗しきれず、みずから命をたたざるをえなかった。ましてやドイツでもまだ知られていない作家の場合は、その苦悩はわれわれの想像をはるかに越えるものがあつたであろう。亡

命の場合、まず国境を越えなければならぬ。そこからまず非難がはじまる。「あの幾日かのうちに早くも私は、最初の亡命者を見た。彼等は夜間ザルツブルクの花々をよじ登り、あるいは国境の河を泳ぎ渡った。飢え果て、着物は裂け、心は錯乱して、彼らは私を凝視した。彼らとともに非人間的行為からの恐怖的な脱出が始まり、それは全国土に拡まった。」⁽⁹⁾ ツツアイクの筆によると、さすがにわれわれの胸に伝わるものがある。かれらは隣国を指して山・河をこえていった。しかし、ヒットラーは次々に隣国を征服していった。一九三六年三月七日ラインラント駐留、三八年三月一日オーストリア併合、三九年ポーランド侵入と隣国に侵入するたびに、新たな亡命地を求めて多くの亡命者が右往左往したわけである。

最近、日本でも数トンの船にのって中国やベトナムを逃れてきて、海岸で発見され、収容所へいれられ、不法入国で強制退去させられる事件が新聞を賑せるが、実はこれも亡命者であることには変わりはない。がドイツのユダヤ人の場合はもっと深刻であった。一九三八年一月の大迫害までに発せられた一〇、〇〇〇以上の反ユダヤ規定によって、一切の生活手段を奪われた上での亡命であったからである。一方大量の亡命者に入ってこられる諸国の反応も冷たかった。

大戦中、亡命者が抑留されなかったのはソ連とアメリカだけで、

イギリスは強制的に收容され、カナダとかオーストラリアへ送られ、大戦終結後二年目にやっと英本国へ送還されて釈放されたし、フランスはもっと悪く、ドイツのユダヤ人強制收容所にまざるも劣らない收容所に強制抑留されている。しかも、そこはベタン政府の無力もあって、腐敗墮落し、多くの人が飢えと寒さと屈辱の中で死んでいった。⁽¹⁰⁾

その点、もう既に作家として十分に通用する力量がある人はもっと違った道を歩めた。トーマス・マンの長男で、もうすでにいくつかの小説も書いており、後にアメリカ国籍を取得して、アメリカ兵としてイタリア戦線でも戦ったクラウス・マンは「Der Wendepunkt (転回点)」という大部の本を書いているが、そこには彼の一九三三年三月一三日バリ行きの寝台列車で亡命するまでのミュンヘンの状況、⁽¹¹⁾ 亡命後に経験した何ともいえない諸事件が述べられているが、彼は一九三三年九月一日にアムステルダムから「Die Sammlang」という雑誌を発行している。この時期に雑誌を発行するなどということは、高名なノーベル賞作家を父に、プロイセン・アカデミーの長を叔父にもつクラウスだからこそできたに違いない。

この雑誌の創刊のいきさつは最近刊行された山口知三教授の「ドイツを追われた人びと」にくわしいが、本来これは「亡命者の才能をヨーロッパの読者に紹介し、同時にしかし亡命者たちをそれぞれ

の亡命国の精神的潮流に親しませることにあった。⁽¹²⁾上記引用文の直前に、この雑誌には「アンドレ・ジッド、オルダス・ハックスリー、ハンリッヒ・マンが後援してくれた。亡命中のドイツの詩人、文学者はほとんどみな寄稿者になり、さらにまたかなり錚々たるメンバーのドイツ人以外の国際的な名声のある作家も加わった」と誇らかに書いて、それに続いて約三〇人の作家をあげている。ロマン・ロラン、ジャン・コクトー、ベネデット・クロチエ、アーネスト・ヘミングウェイ、イリア・エーレンベルクとなかなかの有名な名があがっているが、どこにも彼の父トーマス・マンの名はない。自分の息子の創刊した雑誌に実父が全く書いていないのは何とも奇妙である。確かに一度は協力を約束していたにも拘らず、一本も書いていない。予告で協力を約束しながらついに一本も寄稿しなかった人にわがシュテファン・ツヴァイクもいた。どうしてこうなったのだろうか。ここにはツヴァイク、トーマス・マンらに共通する何物かがあると考えられる。

トーマス・マンの『Die Sammlung』との関係については、山口知三教授の前述の書物の、『ザムルング事件——トーマス・マンらの「裏切り」』の章でかなり詳しく述べられる。それによると、一九三三年一月一日付の「ドイツ書籍組合ニュース（『書籍商組合ニュース』）に、「ドイツ著作物振興局」の名で「トーマス・マン

とルネ・シッケレとアルフレート・デーブリンは、亡命者たちの雑誌『ディ・ザムルング』の第一号が出たあと、次のような声明を出した。

「ザムルング」第一号の性格は同誌の当初の方針計画にそぐわないものであることを確認できます、マン」。記事は更にこの電報の補足として「私の声明の論理的帰結として私の名前は（協力者）リストから削除されるものと解釈してください。というのも、当然そうなるにきまっていますからです」。というトーマス・マンの手紙を引用している。⁽¹³⁾

この「事件」の意味はつぎの事実と重ねあわせることによって実に明確になる。この記事のわずか四日前の一月一日付の同じ『書籍商ニュース』に最近ドイツを誹謗中傷する亡命者の雑誌が刊行されているが、この種の雑誌をドイツ国内で広める者は「精神的国家反逆罪」を犯した者とみなされ、このような雑誌に協力する者の著作を出版・販売してはならない、と著作物振興局の名で警告を発している。

『ザムルング』とは一切縁切りします、とのトーマス・マンの声明が明らかにされたのは、この恫喝ともいえる振興局の声明のわずか四日後である。文面・時期を考えあわせると、どう考えてもトーマス・マンは当局に全面降伏したと考えられる。そう考えるのが

当前である。

だからこのマンたちの声明を読んだ亡命者たちが怒ったのも当然である。自己の生活基盤を失いながらも必死にしがき苦しんでいる亡命者たちは、何の生活の不安もなく、入国を拒否されることもなく、旅券の期限が切れようとも、向こうから援助の手をさしのべてくれる、ごく普通の亡命者からみればまさに天国にいるように思えるトーマス・マンが、自分の息子が編集し、自分の兄が顧問になって、その名(Sammlung II 集合・結集)のごとく、亡命者を結集して、この苦難の時を乗り切る核にしようとしている雑誌へ結集すべきときに、あのナチスの前に屈服して、お許しを乞うとは一体どうなっているのだ、と非難の声が沸き起こるのは必至であった。

トーマス・マンらに対する非難を最初に発したのはヴィーンの左翼系新聞「Arbeiter Zeitung」である。一〇月一九日付の新聞で、「現在ドイツを支配する体制を批判することを欲し、また批判せざるをえないのは、このような(亡命)雑誌の本質に属するものであることをまるで察知できなかったかのような子供じみた態度をとるのは、グロテスクな醜聞以外の何物でもない」と痛烈な非難を浴びせている。ついで「この四人の作家はいかにも『精神的な国家反逆罪』を犯さなかったかもしれないが、『精神への反逆罪』を犯したことをみずから手で明らかにした……」とつづいているが、(二)で

四人と書かれているのは、『アルバイター・ツァイトゥング』の間違いではない。一人ふえたのはシュテファン・ツヴァイクその人なのである。別口で同じように『ザムルング』の協力者に名を連ねるのを拒んだのである。その間の事情をツヴァイクの書簡を通じて述べてみよう。⁽¹⁴⁾

Frankfurter Allgemeinen Zeitung の学芸欄編集員のウルリッヒ・ヴァインツィールの編集した『シュテファン・ツヴァイク——勝利と悲劇』はツヴァイクの論文、日記、書簡からの抜粋をほぼ年代順に並べたものであるが、そのなかに当然この『ザムルング』事件も取り上げられている。いま、この本を手掛かりにツヴァイクを中心に「ザムルング」事件を考察したい。

山口教授は「ザムルング事件」に連座していたツヴァイクは「二つの点で他の三人とは立場が異なっていた。「三人の場合は背後で糸を引いていたのはS・フィッシャー社だったのに対して、ツヴァイク……の相手はインゼルス社である」と書かれている。そういうことが分かってこの『勝利と悲劇』を読むが出て来ない。いろいろ読んでゆくうちに、日付なしのツヴァイク宛の手紙があった。それは、クラウス・マンが共産党員(Parteikommunist)と呼んでいるヘルツフェルトとE・フィッシャーの両名が書いたもので、その中に「あなたの出版社 (Ihren Verleger) にあなたが出し、そこが

それを公に利用することでしょう」と書いて、その後九年二六日付のかなり長いツヴァイクの手紙が引用されている。これが問題の手紙だろうと思う。⁽¹⁵⁾

〈Die Sammlung〉の発行人が私にずっと前、この雑誌は純粹に文学的で決して政治的性格をもっていないと確約するので、寄稿を頼んできたとき、もしそうであるならば、目下執筆中の書物ハロツテルダムのエラスムスVの一編を掲載すると彼に約束した。私は決して無条件の協力を約束していない。

いま〈Die Sammlung〉の創刊号を見ると大変驚いたことには、純粹な文学誌ではなく大部分は政治をあつかつた誌面であった。だからあの当時私が一編を約束した明確な前提条件が抜け落ちてしまっていた。私はもう既に〈Die Sammlung〉の発行人にこのような状況では、雑誌に協力しないし、寄稿者の名簿に私の名前をあげないように求め、彼はそれを了承した。

もうすでにお知らせしましたように。私は近い将来新聞や雑誌に協力しないし、協力する場合には、あなたに前以て通知します。そして一九三三年クリスマス以来一行の原稿も手放しておりません。

一九三三年九月二六日

ザルツブルクにて。

シュテファン・ツヴァイク

二二)には「Die Sammlung」以外の固有名詞は出てこない。この「発行人」はもちろんクラウス・マンであるのだが、「あなたにInnen」とあるのはだれであるか、これだけでは全くわからない。

上記のツヴァイク宛書簡のもう少し後に⁽¹⁶⁾ Wieland Herzfeldeの返事の抜粋があるが、それを見ると『あなた』は誰か分かる。「…：明らかに、あなたの出版社、すなわちインゼルス書店の有能な店主 Kippenberg 教授に、三〇年来ツヴァイクの全文学作品をドイツで誠実に管理してきたという事実が、公刊されている雑誌(に参加するの)を拒否するか否かは個人的問題ではないと認識させてしまったのだ。」

この手紙の追伸に「バンフレット (das Heft) が印刷されてしまった時に、エルンスト・フィシャーが一月九日付のロンドンからのツヴァイクの手紙を受け取ったと知らせてきた。それにはつぎのようなことが記されていた。《妻へのあなたからの手紙で、——遅すぎましたノ——私の手紙は Kippenberg の名も、敬愛する教授 (Lieber Professor) といふ呼び掛けの言葉もなしに発表されたこと》を知らしました……」。

このような事実を並べてみると、どうもツヴァイクの手紙の公表は出版社の一方的な、発信者であるツヴァイクの了承もなく行なわれたらしい。

さらに、このツヴァイクの手紙に引き続いて、「この手紙は印刷されて、『ドイツ書簡商組合ニュース』に添付された」とあるので、何時かわからないが、この手紙は、マンのフィシャー書店宛の手紙が発表されたあの書籍商組合ニュースに掲載されたことがわかる。

こう見てくるとマンとツヴァイクは私信を出した相手は違うが、同じように、書店の存立をはかるために、その執筆者が自己の思想的立場を表明した私信を無断で公表されている。それもヨーロッパでも有数の有名書店の手によってである。そうしなければ生存できない時代であったといえればそれまでだが、なんともおぞましい時代であった。

註

- (1) Jan Berg: *Sozialgeschichte der deutschen Literatur* (山本尤他訳「ドイツ文学の社会史 下」ウニベルシタス叢書 258. p. 702)。
- (2) *ibid.*, p. 99.
- (3) シュテファン・ツヴァイク「昨日の世界Ⅱ」原田義人訳、(みすず書房昭三九)、p. 544.
- (4) *ibid.*, p. 539.
- (5) *ibid.*
- (6) 本講演は岩波文庫に収められている。

- (7) トーマス・マンは少なくとも三月一二日までは帰国するつもりでいたらしい。それは同日スイスの父の元から帰国した長女(エーリカ)・長男(クラウス)が抱え運転手(彼はナチスのスパイとしてマン家の情報を流していたが、この時はマン家に忠誠を示した)が事態の急迫を告げて、一刻も早い亡命を促した。それをうけスイスの父へ電話で帰国の断念を求める電話を掛けるわけだが、盗聴を恐れて「天気が悪いから」とか「家の中が乱雑になっているから」と理由を付けて帰国を止めるように言うがそれに対して、「そんなことは平気だ、明後日帰る」と告げている。だからこの時点までは明後日に帰国する積もりだったらしい。佐藤晃一・山下肇著「ドイツ抵抗文学(東大出版会) p. 163/4.

- (8) クラウス・マンの「転回点」によると、未だ国籍剥奪されていないトーマス・マンが旅券の期限(トーマス・マンの日記(p. 6)によると期限は四月五日とのことである。)の延長を申し出たのに対して、新しい旅券はドイツで取得できるであろうと回答されたという。だが同時に、彼の財産、銀行預金、ミュンヘンの家、図書、家具、自動車そのほかまきあげられるものは何でも一切没収したそうである。小栗浩他訳、p. 361.

- (9) Zweig op. cit., p. 539.
- (10) 佐藤・山下著「ドイツ抵抗文学」、p. 53. 以下。フランスの場合、レジスタンスとの関わりで種々のケースででてくるのは当然であろう。さらに、中立国スイスの場合は、同書五三頁にある。いずれにしても亡命は常に死の淵をさまようことであっ

た。

(11) トーマス・マンの長男・長女の両名は父トーマスのスイスの亡命先から三月一二日ミュンヘンに戻り、お抱え運転手ハンスの運転する米車ビュイックでマン家に向かう途中、ハンスが事態は切迫していることを告げ、兩名の帰宅も女中や料理人にも知られないように慎重にされ、エーリカはその晩のうちに、トーマスの執筆中で、講演旅行にでかける際、そのままにしてあった『ヨセフとその兄弟』の原稿を入れたかばん一つをさげてスイスに戻り、クラウスは翌日服二着、下着、書籍数冊をもっただけで、ナチスのスパイであったお抱え運転手ハンス一人に送られてミュンヘンをあとにしている。佐藤・山下: *ibid.*

(12) 転回点, p. 359.

(13) この後にはルネ・シッケレ、アルフレート・デープリンの、基本的にはマンのそれと同じような声明文が続ぎ、最後にこれら三人の声明についての監督官庁(＝ドイツ著作物振興局)のコメントが添えられている。山口: 前掲書, p. 48.

(14) この件に関しては *Stefan Zweig Triumph und Tragik. Aufsätze, Tagesbuchnotizen, Briefe*. Herausgegeben von Ulrich Weizierl. (Fischer 1992) 214ff. 215ff.

(15) Weizierl: *ibid.*, s. 89, u. 90.

(16) *ibid.*, s. 94.